

#### 四、安城キャンパスの学園生活

##### ◆安城キャンパスの地

安城キャンパスは、現在の安城市新田町小山にあたりますが、農学部創設当初はどのような地域だったのでしょうか。当時の教員などの回想には、ほぼ共通した描写が見られます。

それは、見わたす限り一面の水田地帯で、春にはレンゲ草や菜の花の赤や黄の色どりが見事であり、また雲雀ひばりの高くさえざる声が印象的であつたいいます。実験で使う蛙かえるも周辺の水田で入手できたそうです。明治用水のあたりにはホタルが飛びかい、ザリガニの宝庫でした。実験室にはイタチが迷いこむこともありました。牧歌的な、典型的田園風景の中にあつたと考えでよいでしょう。現在のすつかり市街地化した姿からは全く想像できません。

日本デンマークの中心地であつた安城は、「農都」とも呼ばれていたように、その中心部は市街地化も進んでいましたが、そこを少し離れば、まだまだ田園地帯であつたのです。初期のころには、すぐ近くにあつた安城農林高校や、時には谷崎潤一郎の小説「細雪」さいめいぎ（一九四八年）の舞台となつた蒲郡がまごおりにある農学校とまちがえられたといえます。



1957年の航空写真。矢印が安城キャンパス、その左斜め下に安城農林高校、最下部は国鉄安城駅（『名古屋大学農学部30年史』より）。

当時はガスも普及しておらず、市内から引いてくると大変な経費が必要だったので、ガスの発生装置を用意して各研究室に配管し、「ガス会社」を作ったなどと冷やかされたというエピソードも残っています。当初は、水も井戸からくみ上げていました。

#### ◆通学風景とその変容

現在なら、安城は名古屋からの通勤圏に十分入りますが、当時名古屋から安城に出てくるには、交通機関の乗り換えがうまく行っても二時間ばかりかかったといえます。安城時代の職員録を見ますと、安城に勤務する教職員の多くは、住所が安城市かその近辺になっています。しかし学生は、一九五六（昭和三一）年に名古屋大学学生部が実施した「学生生活態度調査」により



1961年当時の名鉄今村駅（郷土出版社刊『写真集 安城いまむかし』より）

ますと、農学部では約七割が自宅からの通学生であり、多くは名古屋鉄道（名鉄）を使って通学していました。

名鉄の最寄り駅は今村駅、現在の新安城駅です。農学部創設当時の今村駅は、田園の中に孤島が浮かぶように駅のホームがあったといえます。しかし、やがて今村には工場が集まるようになり、農学部が東山に移転するころには、安城市内で最も都市化の進んだ地域となりました。これにともなつて、安城キャンパスの周辺も以前のような田園風景一色ではなくなっていました。いつしか、実験用に簡単に入手できた蛙も姿を消したといえます。

上の写真は一九六一年当時の今村駅の様子ですが、通勤時間帯だけあって大変な混雑ぶりです。また、ここの踏み切りは待ち時間が長く、ラッ



「名大農学部前」バス停  
 (『名古屋大学農学部30年史』より)

シユをひどくして評判が悪かったとの話も残っています。駅からは名鉄バスが出ており、「名大農学部前」のバス停がありました。農学部創設当時には、木炭車のバスもあつたことです。ただ今村駅からは直線で一・五kmあまりの距離ですから、安城キャンパスまで歩いた学生もあつたことでしょう。

#### ◆碧明寮

自宅通学ではない残り三割の学生ですが、当時の安城市内で下宿先を見つけるのは容易ではなかったと思われます。先ほどの一九五六年実施の調査によりますと、自宅生以外の学生の約半分が学生寮で生活していました。約一五％という寮生の比率は、同時期の八学部の中でとびぬけて高い数字です。

キャンパスから徒歩一〇分あまりの所に設けられた、農学部用の学生寮が碧明寮（へきめい）（安城市安城町毛賀知、現安城市桜町安城県税センター）です。その名前は、碧海郡の碧に、寮の近くを



碧明寮

流れている明治用水の明を合わせたものだといわれています。木造平屋建てで、当初は一六畳の一室に五人が割り当てられ、それが八畳で定員四〇名でしたが、のちに八畳の一室に二人となり、定員三〇名になりました。

ところで、農学部というと、理系学部の中では女子学生の比率が高いというイメージがあります。実際、現在の名大農学部では、学部学生の四〇%以上が女性です。しかし、安城時代にはそのような傾向は全くなく、女子学生はいたとしても一学年に一人か二人程度でした。女子学生の比率が高まっていったのは東山へ移転してからです。

そのせいもあってか、碧明寮では文化委員なるものが決められ、安城学園女子短期大学白楊寮の女子学生とダンスパーティーやハイキングがさかんに行われたようです。

#### ◆安城一家

職員のほとんどは安城市近辺に住み、学生の三割が寮生か下宿生で、残りの七割は自宅生とはいえ、実習などでは



実験室での授業風景

長い間自宅を離れることもあつたでしょう。他の学部がいずれも名古屋市内にあつたことを考えると、内部の人々にとつては、一種の独立した単科大学のようなイメージがあつたのではないかと思われれます。しかも同じ理系でも、工学部や理学部に比べてずっと小所帯でした。しかしそれだけに、教職員や学生の交流や意志疎通がよくはかられ、学部の結束はかたくなり、「安城一家」という言葉もあつたほどです。

教員や学生の間ではスポーツがさかんで、安城キャンパスは、元々が学校であつただけに、当初から専用のグラウンド（野球場）があり、校舎の裏にはテニスコートがありました。学部祭でも、野球やテニス、バレー、卓球の試合が開催されました。学生だけではなく教員も熱心で、特に当初は若い先生が多く、教授・助教授だけでチームが作れるほどであつたといえます。スポーツは、学部内の交流はもとより、名古屋に離れた他学部との交流をはかる手段でもありました。名古屋で学部対抗の大会があれば、それだけ力が入つたものでしょう。



芦田淳第六代総長（安城時代）

先ほども引用した一九五六年度の「学生生活態度調査」によると、アルバイトの有無について、農学部生の約六二％がアルバイトをしていないと回答しています。これは全学平均の約三六％を大きく上回っており、それだけ農学部で何かをする時間が長かったことも示しています。

#### ◆教員と学生の交流

教員と学生の関係も、他学部に比べて親密であったようです。やはり五六年度の調査ですが、学生に教員との接触の度合いを質問して得た回答のデータがあります。それによりますと、

「非常に多い」と答えた者が約一六％もありました。

これは他学部を大きく引き離しています。また「かなり多い」も約二九％と、八学部の中でトップです。逆に「殆どない」は一一％だけでした。

一九五三（昭和二八）年に安城へ赴任し、六四年からは農学部長、六九年から七五年までは名古屋大学総長を務めた芦田淳<sup>きよし</sup>名誉教授は、当時の教員と学生の関係を次のように回想しています。

安城の木造校舎で、夏はすだれを掛けて暑さを凌ぎ、冬は毎朝交代で石炭ストーブに火をついたり、煙突を掃除するのに苦労したものである。今から考えると、あの頃の日本は貧乏であった。しかし、楽しい思い出もある。ストーブを囲んでスルメを焼きながら一杯飲みあれこれ話し、ときに世の中のこと、また生き方に及び、学生と激論を戦わせたことも懐かしく思い出される。教官、学生ともよく学び、よく遊び、連帯感を持つことができた。これは、大学生数が少なく教官と学生との間に大学に対するイメージに差がなかったからであろう。

（『名古屋大学農学部三十年史』一〇六頁）

芦田名誉教授は、二〇〇一（平成一三）年、農学部創立五〇周年記念祝賀会に出席したあと、ほどなく亡くなられましたが、その蔵書の一部は、ご遺族から名古屋大学文書資料室に寄贈されています。

#### ◆ 第一回卒業生とメタセコイア

名大農学部第一期生が卒業したのは、一九五五（昭和三〇）年三月のことです。わずか二一名という少人数でしたが、その彼らが卒業記念に植樹したのが、三本のメタセコイアでした。

現在では珍しくもなくなつたメタセコイアですが、当時においては大変貴重な樹木でした。メタセコイアは、つい六五年前までは、化石の中だけで確認できる絶滅種であると考えられて



植樹した当時のメタセコイア  
 (『名古屋大学農学部30年史』より)

いたのです。それが一九四一年に、中国四川省で樹齢四五〇年と推定される巨木が発見され、「生きた化石」として世界的な話題となりました。スギ科メタセコイア属です。同じスギ科でも、セコイアが常緑樹なのに対してメタセコイアは落葉樹で、冬にはすっかり葉を落とすのが特徴です。

一九四九年、カリフォルニア大学のチェイニー教授から、メタセコイアの苗木が昭和天皇に献上され、天皇はこれを吹上庭園に植樹して、アケボノスギと名づけて愛でたといえます。このチェイニー教授は、五〇年には一〇〇本の苗木を東大農学部の原寛教授に贈り、そのうちの四本が東大農学部附属清澄演習林に植えられました。そして、卒業生の一人保田幹男氏（現名大名誉教授）が、その清澄演習林長から名大に赴任した造林学の高原末基教授を通じ、同演習林から取れた苗木を入手することになったのでした。

#### ◆伊勢湾台風の被害

前章で、一号館と二号館の新築以外は、安城キャンパスの景観が劇的に変わることはなかったと書きましたが、違う意味で景観を変えたのが一九五九（昭和三四）年の伊勢湾台風です。



伊勢湾台風直後の農学部5号館（『名古屋大学農学部30年史』より）

九月二六日の夜、九四〇kmという勢力を保ったまま名古屋市の西方三〇kmを通過したこの超大型台風によって、愛知県では死者行方不明者が約三二〇〇人、床下浸水以上の住家被害は二四万戸に達しました。これに対し、安城市は人的被害こそ比較的軽かったものの、住宅と特に田畑の被害はきわめて甚大でした。安城市にも災害救助法が発令されましたが、市内全域が完全断水したうえに、交通路が遮断され、情報もとだえがちであったために、救援物資が届くまで、市民はとても不安な日々をおくったといえます。

農学部は、建物が仮設の簡易なものが多かったこともあり、とりわけダメージが大きかったようです。ガラスは割れ、瓦は飛び、多くの校舎が中破・小破状態になりました。碧明寮も倒壊をかるうじてまぬがれたほどだったといえます。実験器

具や装置は、室内に散乱していればよい方で、どこに行つたが分からないくらい吹き飛ばされたものもあつて、修理せずに使えるものはほとんどなかつたほどでした。また安城キャンパスは農場や畜産動物を持つていたため、こちらの被害も尋常ではありませんでした。

この結果、農学部の被害見積額は、豊川農場を含めると約六〇〇万円におよびました。これは現在の三億円くらいに相当する額です。